

最下位から全てを積み重ねた一誠

ハラパンダ像

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駒王町に住む兵藤一誠は、ある日墮天使に殺され悪魔に拾われその眷属となった。しかし、学園では嫌われ者で仲間からも蔑まれ、唯一、アーシアだけは彼の味方だった。その彼女を怪物から救うため自ら犠牲になることを選び、彼は死に地獄へ行きある鬼と出会った。

目次

一誠の死相	1
悲しみの別れ	4
赤龍帝死す	8
下種眷属	12
地獄偏	
地獄の審判	18
一筋の光明	24
魂との融合	30
新たなる力	34
主人公設定&キャラ設定	38
一誠生還偏	
生還	43

一誠の死相

〈一誠side〉

俺の名は一誠（性は兵藤）年齢17歳性別は男だ。駒王町に住んでいて、両親とホームステイしているアーシア・アルジエントと4人で暮らしている。

実は俺は悪魔であり今代の赤龍帝だ。その理由は同じ駒王学園に通う学園でも有名な二大お姉さまの一人リアス・グレモリー先輩の眷属だからだ。リアス先輩は3年生でオカルト研究部の部長で、上級悪魔のグレモリー家の次期当主だ。同級生だけではなく後輩の男子生徒や女子生徒にも人気爆発だ。

俺も好意を寄せているが先輩の目にはいつも一人の男子生徒が映っている。その男子生徒の名は神沢 鐘御津〈かみざわ かねみつ〉という駒王学園二大王子と言われる木場 祐斗と並ぶイケメンである。

実は二人もリアス先輩の眷属であるが、俺と鐘御津は幼馴染で転校生紫藤 イリナとも面識があるが鐘御津と俺は違いすぎた。

向こうはイケメンな上に背も高く足も長くスポーツ万能で頭も良く女子達にも人気があり先生方にもよく褒められてイリナはもちろんオカルト研究部の女子メンバー（二大お姉さまのリアス先輩と姫島朱乃先輩、ゼノヴィア、搭城 白音、顧問のロスヴァイセ先生）も鐘御津にしか興味を示さなかった。

それに引き換え俺は背だってそんなに高くない上に運動神経も中の下で、頭も悪いし同級生の松田と元浜と一緒に女子更衣室を覗いたり、女子の目の前でエロ話やエロ本を平気で見るため駒王学園の変態三人組と言われている。

自分でも嫌われる理由は分かっているつもりだが、しかし、どうやってもその衝動が抑えられないのだ。

その所為で禁手《バランス・ブレイカー》に至ることが出来たが、その時に後輩の搭城 白音ちゃんに心の傷を負わせてしまい。姉であ

る搭城 黒歌にも完全に嫌われ警戒される始末。

リアス先輩や姫島先輩からも距離を置くようになり、イリナにも『近づかないで!』と言われ、ゼノヴィアとロスヴァイセ先生も何か嫌そうな顔して俺を見る。唯一、同居しているアーシアは俺の事を庇ってくれるが時々、俺を見る時にかわいそうな物を見るような目で見られるのが嫌だった。

何故、俺と鐘御津はどうして、こんなにも違うのかと来る日も来る日も考え、気が付けば山の中を一人歩いていた。

そして、後ろからアーシアの声がした。

「一、誠ー、さんー!」

「え? ああ、アーシア!」

「どうしたんですか? こんな山奥に?」

「ああ……ごめんごめん。ちよっと考え事をしていてな。」

一誠は後頭部を搔きながらアーシアに謝る。それを見たアーシアは頬を膨らませて一誠に言う。

「もうおー、心配したんですよ! はやく帰りますよ。」

「ああ、わかつt?」

一誠は咄嗟に嫌な気配を感じて、アーシアを庇うと左手の宝玉が光り出す。

「い 一誠さんなんですか? いきなり。」

『相棒、お前も感じたか?』

「ドライグか!?? それより何だ!?? このとてつもなく嫌な感じと凄まじい殺気は!??」

『こんな殺気を出せる奴は……いや……そ……そんなことはない!??』

間違いであってくれよおー!!?』

ドライグが何やら血相を代えていると。次の瞬間。

「な・に・が・ま・ち・が・い・で・あ・っ・つ・て・く・れ・よ・なの？」

「そのとおりだぞ!!? ドライグ!!?」

『はあっ——』。

突然、空から不気味な二つの声が聞こえて来てドライグがいきなり大声で叫び空を見上げてみると。

そこには首が3つあり6枚の翼を持つ、巨大な黒いドラゴンと巨大なドラゴンのフォルムをした漆黒のドラゴンだった。

「おっ……おい!!? ドライグ!!? なんなんだ……コイツ等!!? ドラゴンなのか!!?」

「い……一誠さん……こ……こわいですう……。」

『あ……相棒、ま……まずいぞおー!!? コイツ等……邪龍だ!!?』

「邪龍って、五大龍王の?」

『バカヤロオー!!? ヴリトラなんかと一緒にするな!!? いいか……こいつらは俺達二天龍なんかより遥かに強い。しかも、この2体は邪龍の筆頭格に数えられる3体の内の2体だぞ!!?』

「マツ マジですか!!?」

ドライグから壮絶な事実を突きつけられた一誠は50秒思考が停止した。

つづく

悲しみの別れ

絶望のどん底に突き落とされたかのような中、一誠はアーシアをどうやって助ければいいか考えていると。

「なんか雑魚っぽい奴がいるが、あれが今代の赤龍帝か？　なんか『パツ』としない奴だな。」

「そうだな。あんな頼りなさそうな宿主で、よく今まで生きて来れましたね？　ドライグよ。寧ろお前に同情するよを今まで、た・い・へ・ん・だ・っ・た・な。」

「なんだと——！！！」

邪龍2体の挑発に、馬鹿正直に乗ってしまった一誠だが、邪龍達が一誠に向かって言った。

「ほおー、少しは威勢がいいようだな？」

「ふむー、我々を相手にして無事ではいられませんよ！」

『相棒、冷静になれ。さつきも言ったがアイツ等は俺達より遥かに強い。例え禁^{バランス・ブレイカー}手になつたとしても時間稼ぎにも成らずにやられるだろ。』

「???、じゃ……じゃああ……ドライグ、○?△◇はどうだ。」

一誠はドライグに心で念話して、アーシアに聞かれないようにした。そして、次の瞬間ドライグが。

『しよっ……正気か相棒!?!』

「あのくさつきから二人で何を話しているんですか？」

「あっ！ああ、アーシアに関係ないから俺を信じてくれればいいんだ！」

「……はいー！」

「それでドライグどうなんだ？」

『まあ……たしかに時間稼ぎ位はできるがそれだとお前が……。』

一誠は空に浮かぶ邪龍を眺め、アーシアの方を向いて口から出た答えは。

「……フン、十分だよ。」

「一誠さん、どうしたんですか?」

「アーシア、よく聞くんのだ!」

一誠はズボンのポケットから紙を出して、地面に置きその紙から魔法陣が現れた。

「一誠さん、これは?」

「下級悪魔の俺がコツコツ魔力を溜めて、やっと完成させた転移式魔法陣だ。これで、オカ研の部室まで飛んでいけるはずだ。」

「すごいです。一誠さん!」

「すぐくなんかないよ。魔力を溜まるのにどんなに時間が掛かったか。」

「じゃあ、早く行きましょう。あのドラゴンさん達が襲って来ない内に。」

「いや、これはお前用だ。」

一誠から出た言葉に、アーシアは意味が分からず『えっ?』と答えしてしまった。

「何言ってるんですか? 怖そうなドラゴンさんがいるんですよ!」

早くにげん『これは……?』?、い……一誠さん?」

「これは、一人用なんだ……。俺の魔力じゃ一人飛ばすので……やっとなんだ。」

「そ……そんな、じゃあ私はどうしたら。」

アーシアは口に手を当てて涙を流し、両手で顔を隠し膝を付いて泣きじやくる。それを励まそうと一誠は、アーシアの肩に手を置き明るい笑顔で笑った。

「だから、アーシア！おまえは助けを呼んで来てくれ！」

「たすう…：けえ？、ですか。」

「ああ、俺が時間を稼ぐから大丈夫だ。俺は赤龍帝だぞー！ オツパイドラゴンだぞー！ リアス・グレモリーの眷属で駒7つ消費の最強のポーンだぞー！ それに隙を見て逃げ出せばいいわけだ。五大龍王のタンニーンとの修行で執念深さは保証付きだぞー!!」

「分かりました！ 必ず、応援を呼んで戻って来ます。」

アーシアは涙を振り払って、一誠と向き合って宣言した。そして、一誠は右手に一通の封筒をアーシアに渡した。

「アーシア、これをアザゼル先生に渡してくれ。」

「何ですか。これ？」

「先生に頼まれていたドライグの診察表だ。オツパイドラゴンと言われるようになってから調子悪くて、定期的に出すように言われているな。」

一誠は笑いながら、アーシアに話すと『クスッ』と彼女も笑った顔で言った。

「やっぱり♪一誠さんは笑っている顔がおもしろいですよ。」

「そうか、じゃあアーシア頼んだぞー！ 封筒途中で開けたりするなよ。」

「はい、行ってきます！」

そして、アーシアは魔法陣に乗って消えていった。それが、一誠が最後に見たアーシアの笑顔だった。

(アーシア……今までありがとう。そして、さよなら……！　グスツン)

一誠は涙を流し左腕で振り払い。そして、空に浮かぶ2体の邪龍と向かい合った。

つづく

赤龍帝死す

アーシアの姿が最後まで消えるまで見守り、拳を握りしめ覚悟を決め、2体の邪龍達と向き合った。

「どうやら、最後のお別れは済んだようだな！」

「それにしても、雑魚のように醜く逃げ出すかと思っていましたよ。」

「フン、逃がしてくれるのか？」

「残念だったな！ 俺達邪龍を目の前にして、生きている奴は居ないんだ！」

「その通り我々が通った後は、更地か草一本生えない荒野が残るだけなのですよ。」

「まあっ…どうせ…そんな事だと思っていたがな。」

暗い顔をし自分の運命が、ここで終わると知って覚悟を決め、一誠は邪龍達に問うた。

「お前達に、一つだけ聞きたい事がある!!」

「ん？なんだ？」

「お前達の名前は、なんていうんだ？」

「名前？ そういえば、まだ、名乗っていなかったな！」

「俺も教えるよおー！ 『戦う者に名乗らないのは失礼』と師匠の受け売りだな。」

「よし、いいだろ！ 耳の穴掃除して、よく聞くんぞ。俺様はディアボリズム・サウザンド・ドラゴンアジ・ダハーカだよく覚えとけ!!」

「俺も一度しか言わないから、記憶の髓に縫い付けて置けよ。俺はクレセント・サークル・ドラゴンクロウ・クルワツハだ。忘れたら覚悟して置け！」

「お…俺は赤龍…いや一誠、兵藤 一誠だ!!」

「フーン 一誠ねえ、その名前覚えて置くよ。」

「よし！ 早速始めるぞ。さっさと準備するがいい。そのままでは、

勝負にならないからな。」

「へえ、意外に良い所あるんだな。」

一誠は目を閉じて、思想心理の世界に潜った。

(ドライブグ！準備はいいな!?)

『本当にやるのか、今ならまだ!』

(どこに逃げ場があるって言うんだ!)

『あああ、チツ！わかったよ、お前の好きにしろ!』

(ありがとうドライブグ、お前が相棒で良かったよ。)

そして、ドライブグ札を言い終えると一誠の体に、オーラが纏い呪文が詠唱され始めた。

我、目覚めるは

はのことわりをかみよりうばいしにてんりゆうなり
覇の理を神より奪いし二天龍なり

無限を噛い、夢幻を憂う

我、赤き龍の霸王と成りて

汝を紅蓮の煉獄に沈めよう

ジャガーノート・ドライブ

そこには3体のドラゴンいた。1体は赤い小象のようなサイズだった。対する2体のドラゴンは、空に浮かび赤いドラゴンを見下ろすようで、まるで地を這うトカゲが怪獣に挑むような光景だった。そして、赤い方が飛び出し2体の方も襲い掛かった。

「ハハハハハ！逃げずに向かって来る勇氣は認めるが、本当に勝ち目あるとも思っているのか?」

「勝とうなんて、端から思っていないさ！ただな最後までいいは『漢』おとこて

ところを見せないといけないと思ったからだ。」

「プライドというものか？」

「せめて、自分を慕ってくれる人の前では、無様な生き恥を晒すわけにはいかないんだよ！」

ジャガーノート・ドライブをしようして邪龍達と戦っている一誠は、アジ・ダハーカの魔法の攻撃を何とかかわし、クロウ・クルワツハの特大ブレスを間一髪でかわしたが右腕を失ってしまい、その痛み半端ではないが痛みを堪え、次の攻撃に備えようとするが突然目の前の視界が悪くなり口から血を吐いた。それを見ていたアジ・ダーハカは。

「ゴホツ…ゲツホツ……………ゴホツゴホツ……………ううう……………」

「どうしたんだ？ 随分、苦しそうじゃねーか？」

「……………ど…どうやら、はあはあ……………、死期が迫って来ていやがるようだな……………」

「ホ〜♪ お前命を削って戦ってたのか？」

「はあはあ……………、『ジャガーノート・ドライブ』は強力な力を引き出すことと引き換えにして、使用者の寿命を削っていく捨て身の技なんだよ。」

最早、立っているのでやっとな位へろへろになっていた。

「お前！死ぬ気か？」

「どうせ…逃がす気は無いんだろ。それに俺はもう助からない。」

「覚悟はあるんだな！」

「当の昔に出来ているよ。さあ————！！俺の命が尽きる前にやるうぜ————！！」

「ハハハハハ、上等だよお！ とことんやろうか!!!」

「こんな楽しい戦いは久しぶりだな!!!」

そして、3体のドラゴン達は爆音と爆発の中で暴れ回った。

۲۲۲

下種眷属

時間は少々さかのぼり場所は変わって、ここはオカ研の部室にアシアが魔法陣で転移して現れリアスが声を掻ける。

「あらーアシア、どうしたの？ 魔法陣で飛んでくるなんて珍しいわね。」

「ああ…リアスお姉さま、大変なんです！」

血相を換えて慌てるアシアの素振りに驚いていた。

「どうしたのアシア？ 今日はずっと変よ。」

「実は、一誠さんの事なんです…。」

「い…一誠ねえ…。」

リアスは一瞬考えた。アシアがいつもと違って同様している様子。

「アシア！あなた、あの子に変ことされたのね。」

「え？ち…違いますよ。」

「わかっているわ。あなた、あの子の事を庇っているのね。部室に来たらお尻叩き一万回よ。」

「お…お姉さま、そうじゃなくて！」

アシアが泣きながら訂正するが、リアスは聞く耳を持たない当然である。一誠は学園の女子だけでなく、オカ研の女子（アシア以外）からも嫌われている。そこへ、神沢鐘御津がやってきた。アシアは彼なら一誠と幼馴染なので、話を聞いてくれると思えば近づいた。

「あの神沢さん！」

「やあ！アシアさん！今日もかわいいね。ん？どうしたんだい、元

「気が無いようだけど？」

「あの……実は？……」

「鐘御津（くん）（センパイ）！」

そこへ、横から朱乃とゼノヴィアとイリナと小猫が乱入しリアスも鐘御津の所へ行った。

「鐘御津、今日も『ビシッ！』と決まっているわね。」

「リアスも相変わらず、良い乳してるな！」

不思議なことに鐘御津が言うといやらしくなく、女子にも受けが良く一誠では絶対こうはならない。リアスは両手で胸を隠して頬を赤くして鐘御津を見る。

「もう！鐘御津たら、一誠のエロが移ったの。」

「ははは♪冗談だつて冗談。それより一誠はどこだ？ 今日一度も会っていないのだが？」

「まだ部室には来ていないわよ？」

「何処かで覗きをしているんでしょうね。」

「それもそうか、アイツなら授業よりそっちだな！」

「まあ、当然よね！」

「それとお姉さまも先輩も、私の前であの人の話はしないでくれませんか！」

小猫の『ムスツ』とした表情で二人を見ていった。そして、殆どのメンバーが集まり仲良くティータイムを始めた。そんな中、アーシアはどうしていいか分からなかった。こうしている間でも一誠は助けを待っているのに、そんな時、部室のドアが開きアザゼルが入ってきて、アーシアは咄嗟に、一誠から預かった物を思い出して掛け寄った。

「よう！おまえら元気か。」

「あの、これ！一誠さんから預かって来ました。ドライグさんの診断書だそうです。」

「はあ？何を言っているんだ。診断書なら、朝一誠から貰ったぞ？」

「えっ？じゃあ、それはいったい何ですか？」

「い…いや俺に聞かれてもな？とりあえず開けてみるか!？」

アザゼルが封筒を開けようとした。その時『ピロロロツ』彼のスマホの着信音が鳴った。

「あ！わりーちよつと、待ってくれ！はいはい…。」

アザゼルがスマホで話してしるとアーシアは一誠が何で嘘を吐いたか分からなかった。しかし、次の瞬間『何い???』と大声で怒鳴った。その言葉を前に部室の空気が一転し、皆は呆然ど彼を見ていた。そして、彼は『すー』とスマホが手から抜け下に落ちてリアスが駆け寄った。

「ちよつと ちよつと、アザゼルどうしたの？ いきなり怒鳴ったりして。」

「まずい事になったぞ!! 人間界に『邪龍』が現れたそうだ!!」

その言葉をアザゼルから聞いてオカ研一同は呆然となり、特にリアスは顔が青ざめていた。

「じゃ…邪龍ですって、それ本当なの？」

「まだ情報だけでな。しかし、場所はここから放れた山奥だからお前の領地だな。使い魔からの映像では、かなり凶悪な奴らしぞ。」

それを聞いてリアスは『糸が切れた人形のような』ソファアに倒れ込み、朱乃と鐘御津に介抱されているとアザゼルは言った。

「と…とにかく、まずは、安全最優先だ！俺はサーゼクスに連絡する。あと災厄な場合に備えてシトリーのヴリトラの小僧とヴァーリにそれと一誠にも協力を頼もう！アーシア！一誠は今どこに居るんだ？」

「で…ですから、一誠さんは???」
「なんだ？こっちは急いでいるんだぞ!!」

泣きじゃくるアーシアに、豪煮やしたアザゼルは彼女を怒鳴るがアーシアは泣きながら言った。

「だから一誠さんは今！その『邪龍』と戦っているんです!!」

アーシアのその一言でアザゼルは目の前が真っ白になり、その事を聞いていた他のメンバーも思考が停止し、小猫に至っては持っていたクツキーが指を滑り床に落ちた。そして、アザゼルはアーシアの肩を持って。

「ど…どういふ事だ!!それ…お…おまえ!!それを知っていて何故、俺達に教えなかつたんだ。」

「わ…私は真っ先にリアスお姉さまに報告したんです…。それなのに、私の言う事は皆さんも信じてくれないし…グスン。いくら一誠さんが嫌われ者だからって、信じてくれないなんてあんまりです…うううう。」

アーシアはそう言って床にしゃがみ、両手で前を隠して許しをこうかのように泣いた。そして、アザゼルは部屋にいる全員を見回して見ると、まるで自分は関係ないかのように目を逸らした。『チッ』こいつらと心で舌打ちをした。その時、『ハッ』と一誠がアーシアに渡して自分のところに来た封筒を見て何か嫌な予感がしたが、仕方なく中を検め、その中身は手紙で彼はそれを恐る恐る読んでいき、次の瞬間に彼は手紙を『くしゃくしゃ』しながら泣いていた。

「あ………あのお——、バカがあ——!!!」

アザゼルは大声で叫び落としたスマホを拾い上げて、翼を広げ窓から飛び出していった。アーシアも後を追うべく翼を広げ飛び出そうとすると、リアスが彼女の腕を掴んだ。

「何してるの?」

「いやだつて!—誠さんが!」

「危ないわよアーシア。『邪龍』というの天龍や五大龍王より凶暴とされているの。アザゼルは墮天使の総督だけど貴女は下級悪魔でしょ。それに神器は回復用で戦闘用じゃないでしょ。」

「だ………だったら、皆さんも一緒に!」

だが賛同する者は一人も居ないどころか全員首を横に振るだけで、それどころかリアスは腕をクロスさせ他の眷属も。

「勘弁してね。いくら上級悪魔でも『邪龍』を相手にできるわけないわ。」

「アーシア、戦いに犠牲は付き物だぞ。」

「そうそう、あとは強い人達に任せましょう。」

「無駄な争いに首を突っ込む必要はありませんよ。」

「アーシアちゃん、お茶いかがですか?」

「あとはサーゼクス様達に任せましょう。」

皆一同は自分の事しか考えず、面倒事は他に任せららしく、アーシアは自分の力の無さを恨み下を向き涙を流した。

場所は変わり『邪龍』が発見されたという山奥、その一帯を搜索しているのは天使と墮天使と悪魔、アザゼルが連絡して呼んだサーゼクスとミカエルたちであった。しかし、遠目で見てもひどい有様だった。木は殆ど焼け焦げている上に、地面は『これでもか!』という位の超でかいクレーターが出来ていて、山の殆どが原形をとどめておらず、肝心の『邪龍』はもうそこにはいなかった。

「しっかし、ひでえー有り様だな!どんな事すればこうなるんだ?」

「駄目ですねえ、やはり『邪龍』は何処にもいませんね?」

「まあ!いたとしても我々が対処できるわけでは無いんですがね。」

三大勢力のトップ達が雑談をしてすると一人の探索員が叫んだ。

「あっちのほうに人影が見えます。」

「何!?!」

アザゼル達が急いでその場所に向かって行ったら、そこで彼らが目の当たりにいたのは、崖の縁で左腕にブーステット・ギアと右腕を失ったが、見事なまでに立派に立ったまま絶命した一誠がいた。それはまさに本物の王者の姿だった。その光景を見ながら彼らは涙を流して彼の勇士を眼に焼き付けるのであった。

そして、彼の魂は地獄へ行った。

つづく

地獄偏 地獄の審判

駒王町に住んでいた兵藤一誠は仲間に見捨てられ『邪龍』に殺された。そして、彼の死後リアス・グレモリーの身勝手な判断で、町や学園と一誠の両親から彼の記憶や存在は抹消された。彼の両親に『子供がいないのでアジアを養女にした』という記憶を植え付けて、全てはリアスが自分の管理する場所で、問題が起きてはまずいからとまとめてみ消したのだ。だが、リアスとその眷属とアジアとシトリー眷属はサーゼクスの命令で記憶は消してはならないと言われたそう。『邪龍』が現れた時に報告どころか連絡も寄越さない、挙句の果てには知らんぷり。これにはさすがのサーゼクスも激怒してリアスとその眷属（アジアは除く）はこつてり絞られた。

ここはこの世とあの世の境い目、三途の川を渡り審判の門と書かれた看板があり、門を潜ると審判を下される死装束シニシヨウソクを纏った死者の行列の先には二人のある者達がいた。それは王冠をかぶり髭を蓄えて台に乗っている閻魔大王らしき者だったが、見た目は出目金顔の太った中年オヤジのような感じだった。それに引き換えもう一人の横で金棒を肩にかけて閻魔大王と話しているのは、黒の着物に黒髪のサラサラシヨートカットで、目は『ビシッ！』としていておでこに角が一本生えた鬼だった。そんな中同じ死装束を着た一誠も恐る恐る

前と進んでいた。

〈一誠side〉

これから天国行きか地獄行きかが決まると思ってた前へ進む。

「はい、次の方。」

「どっ どうもはじめまして！」

黒髪の鬼に呼ばれて返事をし、もう成るようになれと覚悟を決めると閻魔大王が答える。

「んくと、きみは転生悪魔か。」

「……………」

ついさつきまで緊張していたが、随分イメージが違うので拍子抜けしてしまった。

「ふむふむ、きみは堕天使に殺されて悪魔に拾われて転生悪魔になったんでしよう？」

「あ はい そうです。その通りです。」

なんだ思ってたより軽いんだな。これなら天国行きになるかもと思っていると隣の黒髪の鬼の人がこつちを睨んでいた。

「残念だけど！きみ……地獄行きだよ！」

次の瞬間、閻魔大王が地獄行きと言って来た。

「ええええくどうして、俺！人助けして死んだのに何か罪になる事し

たの?」

「いや、きみねえ……同じ学校に通う学園で覗きや猥褻ワイセツな行動していたでしょう……。」

その最もな言葉に何も言えなくなってしまった。

「それに悪魔と堕天使は死んだら、自動的に地獄行きって決めっているんだよ。」

「え! どうしてそうなっているんですか?」

「いやあく悪魔は自分達の都合で、他の人間や種族達を眷属しているでしょう。中には本人の意志は関係なく無理矢理眷属にする者もいるし、堕天使も自分達の都合の悪い力を持った人間を殺したりしているからさあー。」

更に追い討ちを掛けるかのようなマシンガントークに、俺は何も言えずに固まってしまった。

「……………、はい……………分かりました。地獄でもどこでも結構です……………から。」

そして、全てを受け入れ俺は地獄の門を潜るところで後から声がかかった。

「あなた、ちよつと待ちなさい!」

振り向くと、そこにはさつきほどの黒髪の鬼がいた。

「なっ なんでしょうか?」

「あなた!随分、素直に受け入れましたね。普通地獄行きと言われれば暴れたり喚わめきき散らしたりしますよ? 悪魔なら尚更です!」

「あああ……………まあ……………慣れてますから……………ははは。」

「どういう事ですか？」

とりあえず門を潜るのは止めて生前の自分の人生、周りの扱いなどを話して愛する人を守って死んだから、もう悔いはないので腹をくくって受け入れたと話した。

「成る程！　しかし、話を聞く限りでは、地獄行きになったのはあなたの行いにもあるのでは？」

容赦のない一言に返す言葉すらなかった。

「は……はい。悪魔になる前もやりたい放題で親不孝でしたから……。」

「覚悟は、あるんですね。」

「はい……もう出来てますから……。」

「はい、合格です！」

いきなり『合格』と言われて状況が呑み込めなかった。

「あの……ごっつ合格って何ですか？」

「合格と言っても、まだ見極めの段階です。つまり地獄、八大地獄に落ちて全ての地獄の苦しみに耐え抜いた時こそ、あなたに。」

「あなたに？」

「二段目閻魔大王の座に、着いて貰います！」

突然の事にどういう事なのか、言っている意味が分からなかった。

「に……二段目！　ええーえ……閻魔………大王？」

「まあ、驚くのも無理ないでしょう。いきなり、こんな話を聞かされれば。」

最もな話を聞かされて鬼が口にした言葉は。

「順を追って説明しますと、地獄を管理しているのは今の閻魔大王ですが、それはこの地獄ができたばかりの頃、誰も皆を纏める者がいなかったため、仕方なくあの人が地獄を納めることになったわけです。」

「あの……それって押し付けじゃ?」

「まあ、納めていると言っても、それは建前で管理は私がしているのでぶっちゃけ『雇われ閻魔大王』という感じなんです。」

それじゃあ、別に俺じゃなくてもよくねえーか。

「管理はあなたがしているんなら、あなたがなればいいんじゃない!」

「いいえ! 私は先頭に立って目立つのは性に合わないんです。それに。」

「それに?」

「いいえ! 何でもありません!」

質問を途中で止めて、次に黒髪の鬼は。

「申し遅れました。私は鬼灯ホウズキと申します!」

「あつ これはどうもご丁寧に。でも閻魔大王本人に確認を取らないんですか?」

「いいえ、実際本人もそろそろ引退して老後を過ごしたいとぼやいていますから。では、地獄に落ちてください。」

〈一誠 side out〉

結局、その先は聞くことができず、俺は地獄に落ちた。

つづく

一筋の光明

一誠が地獄の八大地獄の獄卒を受け、切られ煮られ焼かれ痛め付けられるが彼の目は死んでいなかった。

〈鬼灯side〉

正直、ここまでとは思いませんでした。彼は人間から悪魔に転生したようですが、それだけでここまでとは！

「正直言つて、ここまでとは一体何故、そこまで追い詰められて音を上げないのでか？」

「別に自慢する訳じゃないんですが、修行でドラゴンに追いかけて炎のブレスから逃のがれて、死ぬ直前も邪龍とドンパチしていたんでこの位じゃ狼狽うろたえたりはしませんよ！」

この少年なら、もしかしたら！

「どうやら、貴方には少し温ぬるかったのかもかもしれませんね！」

「え？そっ それでどういう意味ですか？」

「貴方には八大地獄だけでなく、八寒地獄にも落ちてもらいます。」

「ええー！ 何で？八大地獄だけじゃなかったんですか？」

「地獄を納める者として十六地獄全てを知って頂かなくてはなりません！」

フフフ♪久々に骨のある奴が来ましたね！ こうなったらトコトンやるとしますか。

〈鬼灯sideout〉

そして、一誠は八大地獄だけでなく八寒地獄にも落とされ背筋がゾツとなるどころか、絶対零度の寒さに体を手で擦りながら肌や足は凍傷で青白くなり、冷気で髪もパリパリに成り果て、周りからは猛烈な吹雪や強風、上からは巨大な氷柱が降り注いで来る始末。それでも一誠は立ち上り諦めなかった！

〈一誠 side〉

氷の山の上で氷ついた魚を噛っていた。俺に後から声がした。

「やあー！ お久しぶりですかね？」

そこにはニット帽を被り防寒着を着用していた鬼灯がいた。

「久しぶり……かあ……。まあ、いいか……シヤリシヤリ。」

「随分、テンション下がってますがまあいいでしょう。」

人の気も知らないで、全くこの人はあぁー殴りてえ！

「それでは、本題に入らせて頂きます！ 結果は合格です。」

マジか！ 本当に俺が二段目閻魔王に慣れんのか？ だけどそうだったら。

「なあー、鬼灯さん！ 質問があるんだが？」

「何でしょうか？」

「閻魔王になるって事は、ずーと地獄で暮らすって事なんだよな！」

「ええーその通りですが、当然亡者と同じ扱いではなくちゃんとした部屋や食事を用意しますが何か？」

「この際だ！ダメモトで言うぞー！」

「あつ あのー、もし願いとか叶うなら生き返らせくれない！」

「どういう事ですか…… それは？」

俺が言った一言で、鬼灯は眉間みけんにシワを寄せて凄まじい顔してこつちを睨んだが。

「審判の門でも聞いたと思うんだけど、俺は堕天使に殺されて悪魔に転生させられただろ。別に好きで悪魔になった訳じゃないし！」

「確かにそれはそうですね。」

俺の説明で眉間のシワはなくなり、顎に手を付きひじを持つ鬼灯。

「本音で言えば、三大勢力が居なければ、俺は普通の人生を送っていたのかもしれないだろ。閻魔大王になる代わりにもう一度だけいい、人間として『生』を全うまっとうしたいんです！」

「まあ、大体は分かりましたが。でも、貴方悪魔になる前から覗きや18禁未満の本などの観賞しているとありましたが生き返って、又同じことをするつもりですか？」

もつともな答えに何も言い返せない自分が情けなくなった。

「じゃあ……やっぱり、だめですか？」

「いいえ、あなたの言う事にも一理ある気がしますから。確かに悪魔と堕天使の所為というのは認めましょう！ ただし。」

「ただし？」

「あなたから『色欲』を取り払わせて頂きます！」

『色欲』って『性欲』や『煩惱ぼんのう』の事だよなあ。

「それ……取り上げないとダメですか？」

「はい！　こちらとしても特例という意味でリスクを背負う訳ですから。　それとも、やはり止めておきますか？」

どうする……俺から性欲を取ったら、一体何が残るんだ。　いや、しかし、元はと言えばそれで周りの人から軽蔑けいべつされ阻害そがいされていたのかもしれない。　むしろ、これは良いチャンスかもしれない。

「分かりました。　性欲でも何でも取り上げてください。」
「よろしい！」

そうして、俺の中から性欲や煩惱が無くなり、何故か思っていたよ
り落ち着いていて清々しい気分だった。

どうやら俺の選択は間違っていないかったようだ。

「では、あなたを生き返らせるんですが本当によろしいのですか？」

「え？　また何か問題があるんですか？」

「あなたは一度死んでいますから、神滅具はもうありませんよ？」

「あつ……！」

そうだったそうだったすっかり忘れていた。　確かに邪龍に殺され
れ肉体から魂が離れた時に、ドライグの声が『あばよ……相棒。』と聞
こえて来た。

「今生き返ったとしても、又、悪魔や堕天使に命を狙われないとは言
いけないでしょう。」

「結局、人間は天使や悪魔からすれば玩具なんだな……　クツソォー
！」

俺はその時程、腸はらわたが煮え繰り返った事はなかった。

「あの……もし、よろしければ、修行してみますか？ ……その力を身に付けてから生き返えつてはどうかということですが？」

「どういう事だ？」

「いや、こちらとしても見す見す貴方のような、逸材を手放すほど馬鹿ではないですよ！ 望みが叶わないまま二代目になるのを断られては悔くですから。」

「どういう風の吹き回しかは突っ込まなつたが、この際だ藁《わら》にでも下^すがる思いでなるようになれだ！」

「先ず、一番手っ取り早いのは『融合』ですね。」

「融合それって『合体』のことですか？」

「はい！まあ、融合と言っても『魂^{ソウル}・フュージョン^{フュージョン}』ですが。」

魂^{ソウル}同士の融合？ それって力とどういう関係があるんだ？

「魂との融合は他の人との『同化』という意味で、その者が持っている力を身に付けることが出来るんです。」

「す、すげえー！」

「ただし、一つ問題があります。」

なんだよ！ ……ここまで勿体付けておいて、今さら！

「魂との融合なので融合した時に、あなたの意志が負けてしまうと意識を乗っ取られてしまうのです！」

成る程、当然他の魂の意志もあるから易々^{やすやす}とは行かないよな。でも。

「どうします。やっぱり、やめますか？ それとも時間を掛けて武術

等を学びますか？」

「武術も学ぶけど、受けるよ！ 魂でも何でも力が手に入るなら何でもやるさー！」

「フーン！分かりました。しかし、私は手加減はしませんよ！」

こうして、俺は生き返えるために力を付けるべく修行を始めた。それともう一つ、野心が芽生えていた。

へー誠sideout<

つづく

魂との融合

修行を開始して、随分時間が経ち鬼灯が言っていた。『魂との融合』は地獄にいる罪人との融合だそうだ。まあ、ここは地獄だから当然いるのは罪人に決まっているよな！　しかし、思っていたより融合してくれる人は結構いたし、鬼灯さんが紹介もしてくれた。

「こちらの方は『忍びの世』とされる世界で、数多くの大罪を犯した方ですが、不思議な眼や忍術をお持ちですよ。」

「お初にお目にかかるぞ。小僧！　俺はウチハ　マダラだ！」

「そして、こちらの方は霊を司りあらゆる自然の脅威きょういをコントロールし、五行ゴギョウと式神を操れます。」

「初めまして、私は大陰陽師アサクラ　ハオと申します！」

「それで、こちらは『海賊の世』で大昔に龍を切ったと言われた侍です。」

「ヨホホホッ♪、随分、威勢の良い若僧ですね！　申し遅れました。

私は豪剣のリューマと申します。　以後、お見知りおきを！」

忍者に陰陽師に侍か！　世界は広いなー。　まあ、悪魔や天使墮天使が居るんだ。深く突っ込まないでおこう。

「でも、あんたら本当に良いのか？」

「フン、どうせ！　永遠に地獄暮らしなのは目に見えている。だったら融合でも何でもして、こんな悪夢からさっさとおさらばだ！」

「私も自分の命をコントロールして生き返えるんですが、正直生き返っても周りは私についていけないようで、ぶっちゃけあなたと同化して『無』に帰ろうと思っっているんです！」

「ヨホホホッ♪私も同じ気持ちですよ。死んでからかなり時間が経ってしまったため、もし、あなたの意志を乗っ取り生き返ったとしても、私は最早過去の異物の何者でもありません！」

そう言つて、三人は寂しげな顔していた。と、そこへ。

「カカカツ、面白いことをしているのおー!」

そこへ、白髪で黒の着物を着て杖を突いた爺さんが来た。

「あなたが何で!ここへ!」

「カカカツ、ワシの耳は地獄耳なんじゃ!　ここが地獄なだけになんちつて♪」

寒いギャグを噛まし杖を突く爺さん!　周りはしらけきっていた。

「で、話を戻すが御前さんと同化すると生き返えられるのか?」

「あのく鬼灯さん。　このお爺さんは誰ですか?」

「この方はヒョウドウ　カズタカという重罪人ですね!」

ヒョウドウ!　家の親戚に、こんな人居たかな?　まあ、多分赤の

他人だろ!

「重罪人つて?」

「この方は、私わたくしども 共ホトホトも程々手を焼いているのです!　どんなにキツイ獄卒を与えても責め苦を与えてもまるで反省の色がない!　あなたと同じ八大地獄と八寒地獄を達成した一人なのです!」

何やら鬼灯さんが、又、眉間にシワ寄せて怖い顔しているが。

「じゃあーこの人が閻魔大王に慣れb『ダメです!』∴。」

俺が喋っている途中で、いきなり鬼灯が大声を出した。いったい何をそんなに怒っているのか?

「この方は生前に犯した罪が重すぎいや残虐すぎるため、もし、閻魔大王の座に着いたら地、獄その物がまずいことになります！」

あの冷静で落ち着いている鬼灯さんが黒いオーラが出ているため、それ以上は聞かないことにした。

「で、爺さん！ あんたと同化して俺に何のメリットがあるんだよ？」

「クククツ、小僧！ 『強運』は欲しくないか？」

「強運？」

「そうじゃ！ 『運』というのは、その者の才能という物なんじゃ、ホレ、『運も実力の内』というじゃろー！」

確かに御最もな答えだ。しかし。

「なあ 鬼灯さん！ この爺さんの言っている事ってデマじゃないの？」

「ええ、認めたくはないのですが、この方は生前にとんでもない強運と悪運を持っていて、政財界や闇の世界で乗しやがった実力者なんです。」

嫌そうな顔して、腕を組みイライラ顔で睨んでいた。

「鬼灯さん。この際だ。この爺さんも頼む。」

「よ、よろしいのですか？ 意志が負ければあなたが。」

「負けないよお！ それに鬼灯さん達も手を焼いているんなら爺さんは、ここにいない方がいいだろー！」

「まあ、それなら。」

そして、俺はマダラ、ハオ、爺さんと同化することに決めた。ちなみにリユーマとは剣術を学んでからにしようと思った。しかし、あ

のカズタカの爺さんは本当にしぶとかった。他の二人はあっさり俺に力と能力を渡して消えたが、爺さんの方は俺の意識を乗っ取ろうとしつこかった。油断するといつ乗っ取られるか分からないから用心しないと。

へー誠[sibeout]く

つづく

新たな力

一誠は地獄でリユーマに剣術を習い、鬼灯には組手を教わりながらとずいぶん時間も経ち、稽古中は二人を師匠と呼んでいた。そんなある日。

〈一誠 s i b e〉

「ヨホホホッ♪では、修行を始めたいと思いますが今日は、剣意以外にも別の修行も行いますよ。」

「別の修行?」

「ええ、『覇気』という力の事です!」

リユーマが修行をつけてくれるのは良いが、突然の一言に意味が分からなかった?

「師匠!その覇気って何?」

「いいですか! 覇気とは生ける者全てに潜在しているのですよ!

『気配』『気合』『威圧』これらは人間も感覚と変わりない。しかし、残念な事にその力に気づかず引き出す事も出来ずに、一生を終えてしまうのですよ。」

「はあく?まあ、すごい力なのは分かりましたが、実際に見せてくださいよ。直接、目で確認しないと信じられませんよ?」

「ヨッホホホ♪せっかちな御人だ。心配しなくとも、もうすぐ来ますよ。」

「グオオオオー」

リユーマが喋り終わると不気味な声がし上を土産で見ると、とんで

もない大きさの大鬼が金棒を肩に乗せてやってきた。

「し…師匠、後！後！」

「分かっています！ 鬼は金棒で私の頭を右から狙っていますね。」

「え？ 見もしないで何で？」

「覇気は大きく分けて3つ有ります。」

ドカーーン

その瞬間、大鬼は片手で金棒を振り下ろしたが、リユーマは大鬼の方は見ないで紙一重で交わした。

「相手の気配をより強く感じる力。 これが見聞触けんぶんしょくの覇気です!!」

「ス…スツゲェー!!!」

「これを極めた者は視界に入らない相手の位置、次に相手が何をしてくるかが読み取れる。」

リユーマが解説する中、後で蚊帳の外の大鬼は業を煮やしたかマジギレで両手で金棒を振り上げた。

「次に武装触ぶそつしょくの覇気ですが、これは見えない鎧よろいを身に着けるイメージを持つことです！」

そう言つて、リユーマは拳を握り締めて大鬼の方へ、右ストレートで金棒を砕き割り大鬼は後へ倒れ込んだ。

バッキーン!!

「ブオオオオオオー」

「より固い鎧は当然、攻撃力にも転ずる上にこの力は武器に纏わせる事も出来ますよ。」

「てっー事は木の棒切れが鉄の棒につて事か？」

俺の質問に大分理解出来てきた事で、リユーマは少し表情が微笑んだようだ。

「さて、大まかに説明しましたが『見聞触』と『武装触』この2つが覇気です。ですが、極一部の者には、こんな覇気を扱える者がいます。」

「えーまだあるの？」

そして、後で倒れ込んでいた大鬼は完全にブチキレてしまい、大きな口を開けて俺達を食ってやろうと襲い掛かって来たが。

ドツクンー!!

ドツスウー?!!!

リユーマが大鬼を睨んだ瞬間、気を失ったかのように前の目に倒れ込んだ。

「ヨツホホホ♪これが相手を威圧する霸王触はおうしよくの覇気です。この力を持つ者は大きく名を上げる事が多いのです。しかし、この霸王触だけは他の2つとは違い、コントロールは出来ても鍛えることが出来ません。これは持つ者の気迫、素質で強化されます。」
「.....」

壮絶な光景を目の当たりにした俺は、今までの自分が以下にちっぴけな物だという事を思い知らされた。

「如何だったでしょうか？ 言って置きますが私は優しくはありませんよ。ヨツホホホホッ♪」

「こんなすげえーもん見せられて、やめる馬鹿がどこに居るよ！上等だよーやってやるじゃねえーか!!」

そう叫ぶとリユーマは、口を吊り上げ嬉しそうだった。

〈一誠 s i b e o n t 〉

つ
じ
く

主人公設定&キャラ設定

主人公（新生一誠）

名：極門 一誠

性格：クソ真面目で神経質

多重人格（三人の魂と同化したため、残留思念として人格が入れ替わることがある。）

性別：男

種族：人間（鬼人）

一度死んでいるため神滅具を失っている。地獄で修行して新たな力を得て生き返り、自分を蔑んで来た元主と眷属や三大勢力に復讐を誓った。（アーシアは除く）

名：鬼灯

性格：真面目で怒らせると怖い

性別：男

種族：鬼

地獄の閻魔大王の側近で第一補佐官、一誠が地獄に現れた時から彼に目を付けていて、二代目閻魔大王にしようと企んでいる。一誠が閻魔大王になる代わりの条件で生き返らせたが、彼が三大勢力の手に再び落ちないよう監視する為、自分も人間界に彼と同行する事にした。

名：豪剣 リューマ

性格：冷静沈着

性別：男

種族：鬼侍

地獄で一誠に剣術を教えて最後に彼と同化するつもりだったが、一誠がそれを拒み自分も一緒に来て欲しいとせがまれ、彼が必死に鬼灯に頼む姿に心を揺さぶられ、彼と一緒にいこうと決意が固まった。

名：アザゼル

性格：チランポランで適当

性別：男

種族：墮天使

墮天使の総督で三大勢力のトップ、駒王学園のオカ研の顧問でリアス達のグズツぷりに頭を抱えて胃を痛めている。

名：サーゼクス・ルシファア

性格：真面目で情愛深い

性別：男

種族：純血悪魔

現四大魔王の一人で三大勢力のトップ、リアスの兄で妹にせがまれるとつい甘やかしてしまうのがたまに傷だ。ちなみに、結婚はしていてグレイフィアとミリキヤスと家族円満だ。

名：ミカエル

性格：真面目で紳士

性別：男

種族：熾天使

五大熾天使（セラフ）の一人で三大勢力のトップ、天使長をして聖書の神の代行もしている。

名：リアス・グレモリー

性格：自分勝手

性別：女

種族：純血悪魔

常に周りを上から目線、領地で問題が起きても兄のサーゼクスに泣いて頼めばなんとかしてくれる。所謂、道楽者だ。

名：姫島 朱乃

性格：ドS

性別：女

種族：転生悪魔（堕天使のハーフ）

普段おっとりしているが、実は超が3つ4つ付く程の超ドS。雷を操り敵が苦しむ様を見るのが最高の楽しみ。

名：塔城 小猫（本名は白音）

性格：気が弱い

性別：女

種族：転生悪魔（猫又）

小柄な体系に似合わず馬鹿力で格闘技にも精通しているが、一誠のせいで引きこもりに成ってしまったことがある。

名：塔城 黒歌

性格：妹想い

性別：女

種族：転生悪魔（猫又）

妹の小猫をととも大事にしている。だが小猫が引きこもりに成ってから一誠を恨んでいる。（カオス・ブリゲードでヴァーリチームに属している。）

名：木場 佑斗

性格：優柔不断

性別：男

種族：転生悪魔

イケメンではあるが自分さえ良ければいいと思っている。神器の禁手に至ったのも周りのおかげでなく、自分の力だと思っている。

名：ゼノヴィア

性格：戦闘馬鹿

性別：女

種族：転生悪魔

戦えれば周りがどうなろうと知った事ではないと思っている。

名：紫藤 イリナ

性格：天真爛漫

性別：女

種族：転生天使

人間から天使に転生してからも神の信仰は変わらない。ただし、全ては神の為だからと関係の無い者も敵として殺すようになり、神の名を借りて嘗てのフリード・セルゼンのように。

名：ロスヴァイセ

性格：マイペース金の亡者

性別：女

種族：転生悪魔（ヴルキュレー）

元北欧の主神オーディンのお付きで転生悪魔になってから、駒王学園の教師であるが信じられるのは『お金だけ!』と言い張る。

ヒロイン

名：アーシア・アルジェント

性格：おしとやか

性別：女

種族：転生悪魔

リアスの眷属の中で唯一、真面目で一誠の事を心の底から好きでいる。(一誠と再会した時に、悪魔から人間に戻る)

名：ヴァーリ・ルシファイ

性格：好奇心旺盛

性別：男

種族：悪魔と人間のハーフ

一誠と違い歴代最強の白龍皇で旧魔王の血を引いている。カオス・ブリゲードの組織の一枚岩、一誠が復活したと聞きつけ再び戦いを挑む。

名：神沢 鐘御津

性格：爽やかで大人しい(実は女誑し)

性別：男

種族：転生悪魔

実は神のミスで死んだ転生者である。生前は学校で虐めを受け引きこもりに成り所謂ニートである。転生する時、神に特典として自分に異性が魅了される力をくれと言った為、リアス達は彼の虜になったのだ。長い事パソコンにかじりついていたせいかネットやゲーム世界で勝ち続け、自分の手は汚さず戦いは自分を慕う女に任せるという考え方になってしまった。(アーシアが魅了されないのは、戦闘役でなく回復役で使えないという気まぐれであった。)

一誠生還偏 生還

一誠は地獄で凄まじいまでの修行をくり返して、ついに三大勢力いや神と並ぶ程の能力ちからを手に入れた。そして、願い通り一誠は再び現世に生還することができ、彼は生まれ育った駒王町にいた。

〈一誠 side〉

俺は地獄から生還し、生身の体を実感していた。生きていた頃は当たり前なことだと気にもしなかったが、こうして体があるという事の幸せを感じ取っていた。

肌で空気に触れ自身で呼吸し、体を自由に動かして太陽の日の光にあたる心地の良さを！

(あああー、俺は生きているんだ???)

体がある大切さを実感しつつも町を歩いても、俺の顔を見て驚く人はいないどころか声をかける人もいない。当然なことだが、鬼灯殿も言っていたけど。

「いいですか？ 現世に生還はさせますが、周りの人々の記憶はどうにもなりませんからね！」

「どういう事ですか？」

生還する前に鬼灯殿から言われたが、どうも元主のリアス・グレモ

リーが俺が死んだことを隠滅する為に、学園や町の人達から俺に関する記憶を抹消したようなのだ。

それを聞いた俺はもう自分には帰る所はないと絶望した。まあ、蘇ったからといって神滅具も無くなったし、今の俺の能力がどんなものかは今は知らなくていいだろ。

しかし、幸いにもグレモリー眷属とシトリー眷属やアジアは記憶が、そのままだと聞いた時は正直ホツとした。

折角、復讐しようとしても俺が誰なのか分からないのでは意味がない。でも、鬼灯殿は人がいや鬼がいいな。

「先ずは自身で現世へ行つて来てください。自身の目で観て自分の足で歩み、何がしたいかを考えてください!？」

言ってくるけどしたい事は、一つでしょ！

(三大勢力への復讐！)

いつその事、この駒王町ごと消してしまおうとさえ思っていた。

自分はこの町で生まれ高校生に成るまで育つたというのに、何故、存在を消されなければならなかったのか？ 奴等のことを考えながら歩いていると二人組のチームに絡まれた。

「ねえねえ〜兄い〜ちゃん♪ 俺らさあ〜今金無いからさあ〜カンパツしてヨオ〜。」

「おとなしく財布だけ渡すんな〜ら痛いめには合わなくて済むよ〜お」

いかにもバカそうな顔をした奴らだったがどのみち死ぬ運命だし、いつその場で?いや、まてよ！

確か鬼灯殿は『自身の目で観て、自分の足で歩み何がしたいかを考えてください。』と言っておられたが、なんだ何が違うんだ『悪魔や天

使、墮天使に復讐したい』それが俺が生還した理由だった筈だが、いや違う人間として生を全うするためじゃないか？ そうか！

鬼灯殿はその事に気づかせるために、今までアイツ等のことを考えながら修行していたせいか、すっかり『復讐』しか見えていなかった。そう考えると俺は涙が止まらなかった。

「な なんだよ！ いきなり泣いたりなんかして!!?」

「言っておくがな！ 泣けばいいわけじゃねえんだぞおろオラー!!」

二人のチーマは突然、泣いた俺に暴言を放っていたが、もし、こいつ等がいなかったら関係の無い町の人達まで殺していたところだった。

「ありがとう?……。君達のおかげで間違いに気づくことが出来たよ。」

「はあ——?」

俺は咄嗟に二人を抱きしめて頬に『チュク』をした。

チュツ チュツ

「な！ 何いーしやがんだあー!!? てめえー!!?」

チーマ共は俺から放れて手で顔を拭きながら、こつちを向いて怒鳴るが怒る気にも慣れずそれどころか。

「一度しか無い人生だぞ……、お前たち！ どう生きるかは勝手だが後悔のないようにな！」

「はあー? 何言ってるんだよお前?」

チーマの一人は頭に『?』を浮かべていたが俺は回れ右で立ち去つ

たが。

「てっ……てめえー!!? ふぎけんじゃねえーぞ!!?」

ガシツ!

「やめとけ…… ああいう奴には関わらない方がいいって相場が決まってるんだよ……」

マジギレした一人にもう一人が肩を掴んで止めに入った。

そうして、しばらく歩くと俺は一軒の定食屋に辿り着いた。そこは中学の頃からよく通っていた馴染の店だったからだ。生前の俺は何かと幼馴染の鐘御津と比較され、何かある度に何故かこの店によく来る。

あの頃はどこにも居場所がなかった所為か、俺には数少ない安住の地でもあった。そう思いながら店のドアを開くと白衣を着た白髪の無愛想なおじさんがいた。

カチャツツ♪

「いらっしやいやせー?」

(そうそう?! いらっしやいやせー……)

決してきれいな店というわけではなかったが妙に落ち着く場所でもあった。

そして、先程の白髪のおじさんこそがこの店の大将である。

大将は無愛想で有名だが料理の腕は保証済みだ。何気なく席に付きテーブルに置かれているメニューを取ると。

「何にしやす?」

大将がコップに水を入れて持って来てくれたが、やはり記憶が消されているため、俺の顔を見ても何のリアクションも無いのは少し寂しかった。

でも、俺の思い出は消えていないな。メニューを観ても分かる思いの品『カツカレー』それは中学の頃から通い続けた一番の理由だった。

その店は学生が『カツカレー』を注文すると大盛サービス1.5倍にしてくれる大将の意気なはからいではあったが、あの頃の俺にはどれだけの支えになったか分からない。

「あの……ご注文は?」

「あ! はいはい?、えくと、あれ?」

俺はカツカレーを頼もうとしたら『カツカレー』の下に『カツソバ』という品名が載せられていた。

(以前はこんなメニューは無かったはずだが、いやって言うか?【カツやきそば】だろ! しかし、気になるなあ?……。)

悩んだ挙句に出した答えは。

「カツソバを一つ!」

本当は【カツカレー】を頼むつもりだったが、ここは好奇心というか肝要な心で冒険もわるくない気がした。

「…?以上で、よろしいですか……?」

「あ……、はい。」

大将は心無しか無言で立ち去った。

(……何、今の？ え？ やっぱりカツカレーの方が良かったかな？)

後になって後悔しつつも、持っていたスマホを取り時間をつぶしていく。そして。

「お待ちとおさまです。」

「おー来た来？ 『カツソバです！』 ガ——ン!!」

そこに来たのは井ぶりに日本蕎麦が盛られトンカツが乗せられたカツソバだった。痛恨、まさかの読み違い。

(何やってんだあゝ俺……思い出に浸って浮かれているから墓穴を掘るんだなあ……)

自分の愚かさを感じながら箸を取りカツに触れるとサクリツと箸で簡単に割れた。

(なんだ？……これ!? カツカレーはこんなに柔らかかったか？……?)

そうして、カツの切れ目をよく見ると【しそ】と【梅】が入っていた。しそと梅の愛称は抜群！ 肉の臭みを取るという意味もあるが何より蕎麦との組み合わせがいい。

ズウ——、ズウ——、ズウ——。

そうして、気が付くとカツソバを完食していた。

(フウー、美味かった！ 一時はどうなるかと思っただが……、これはこ

れで満足だな?…。まあ?…カツカレー?…最後の思い出としてアレを食べずに去るのは残念な気がするが?…仕方ないか?…)

そう思いつつ席を立とうとすると。

「へい、ミニカツカレーお待ち?…!」

なんと頼んでもいないのに小さなお茶碗によそられたミニカツカレーが出された。

「え?え? いや、頼んでないけど?」

俺がそう尋ねると大将は言った。

「いやなあゝ儂もよく分らんのだが? 兄ちゃんみたいな常連の客が前にいたような気がしてねえ。中学生の頃からよく店うちに来て決まってカツカレーを注文するんだよ…その子は!。そして、いつもおいしそうに食べるあの顔を見ているとこっちまで元気になるんだ! ……ところがねえ?…最近、まったく姿を見せなくなっているんだあゝ。…まあ、引越したか受験とかで忙しいのかもしれないけど、たまには食いに来て欲しいけどね…。ああ、そのミニカツはサービスだから金はいいよ。」

そう言つて、大将は立ち去るが背中では寂し気だった。

俺も出されたミニカツカレーを手に取り口へ運ぶが何故かカツカレーは少ししよっぱかった。大将の涙の所為か…俺の涙の所為か…は分からなかったが、そして、店を出た俺は覚悟が決めた。

(見ていろよー!!? 三大勢力共!!? 俺の人生を狂わせた落とし前はつけてもらうからな——!!?)

〈一誠 side out〉

それは一誠が三大勢力に強力な復讐心を燃やした瞬間だった。

つづく